

エルサルバドルで出会った日常の温かさ

満尾泰樹

エルサルバドルに到着した初日、預けていたキャリーケースがなかなか戻ってこず、不安な気持ちで立ち尽くしていた。そんな中、隣にいた高齢の男性が、自分の荷物をすでに受け取っていたにもかかわらず、最後まで私と一緒に待ってくれた。

「この国の人は、なんて温かいのだろう」

到着初日に感じたこの印象は、二年後に日本へ帰るまで、一度も変わることはなかった。実際にその後の生活でも、多くの人々に助けられ、支えられながら過ごす日々が続いた。

活動地は、北部に位置するチャラテナンゴ市である。自然に恵まれたこの地域は、人々の温かさにも満ちていた。生活を始めて三か月ほどが経つ頃には、買い物に出かけるたびにあちこちで声をかけられ、名前を呼ばれるようになった。

次第に自分自身も、この地域の一員として受け入れられていることを実感するようになった。



チャラテナンゴの風景

私は野球隊員として現地で野球を教えていた。また、休みの日にはチャラテナンゴ市のリーグで週に一度サッカーをしていた。言葉がうまく通じないことがあっても、ボール一つあれば、国籍や文化の違いさえも自然と消えていった。共に笑い合い、競い合い、同じ時間を共有する中で、人と人とを結びつけるスポーツの大きな力を、何度も実感した。



野球と一緒にしていた子ども達



チャラテナンゴのチームメイト

渡航前、私は国際協力とは、先進国が途上国を支援するという一方向的な関係であると捉えていた。しかし実際には、現地の方々から学ぶことの方が多く、日々の生活の中で価値観が少しずつ変化していった。国際協力とは、一方的な支援ではなく、立場の違いを超えて互いに学び合い、支え合いながら共に歩いていくものであるということを、身をもって実感した二年間であった。

また、配属先の上司からは「日本人がこの街にいてだけで、この街の人たちは学ぶことがあるはずだ」という言葉をかけていただいた。この言葉は、今でも強く印象に残っており、エルサルバドル滞在中の私に、日本人としての自覚と誇りを改めて認識させてくれた。



2年間一緒に過ごした配属先の同僚達

日本から遠い国での活動や生活は思うようにいかないことも多く、ときには気持ちが沈むこともあった。そんなとき、「今日夕方、一緒に遊ぼうよ」と声をかけてくれる子どもたちの笑顔や、「元気か〜?」「昨日こんなことがあってね〜」といつものよう声をかけてくれる地域の方々との何気ない会話に、幾度となく心を支えられた。



チャラテナンゴのみなさん

二年間を通して、私は数えきれないほどの優しさと温かさに触れてきた。その経験を胸に、今後は自分自身が誰かに対して同じように優しさや思いやりを届けられる存在でありたいと感じている。

遠く離れた日本から来た私を、この地域の一員として温かく受け入れ、接して下さったチャラテナンゴのみなさんに、心より感謝したい。

これからのチャラテナンゴの未来を楽しみにするとともに、その成長に負けないよう自分自身も成長を重ね、いつか再びこの地を訪れる日を心待ちにしている。

満尾 泰樹（みつお たいき）氏/ 2024～2026年 JICA 海外協力隊 野球隊員
エルサルバドル・チャラテナンゴ県に派遣。
エルサルバドル・スポーツ庁・チャラテナンゴ支部に配属。
チャラテナンゴ県内での野球普及、また配属先のアクティビティ活動に従事した。
大学を休学して参加したため帰国後は復学予定。